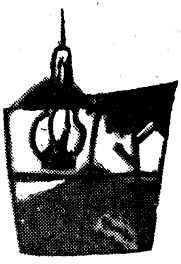
千歲鮭鱒人工孵化場事業報告 (三)



資料

第一章　沿　革（千歲川、千歲川ノ漁業、千歲川ノ天然蕃殖保護）
第二章　千歲川鮭鱒人工孵化場（孵化場ノ現況事業ノ進行）
第三章　事業ノ改善（捕獲場、捕獲法、捕魚車、運搬並ニ採卵、孵化器塗料、孵化槽、簡易孵化室）
第四章　鮭鱒飼育（養魚池、鮭鱒ノ成長、魚体標識）
第五章　かばちゑつぽノ移殖（かばちゑつぽ、阿寒湖、支笏湖、移殖ノ實行、結果）
附篇　鮭鱒ノ種川及ビ漁業、民設孵化事業鮭鱒に關する布令

第五章　かばちゑっぽの移殖

一、かばちゑっぽ

釧路國阿寒湖に、鮭鱒族の一種あり。〃かばちゑっぽ〃と稱す。大さ八、九寸、背部深翠、腹部銀白、肉色紅脂の如く、頗る脂肪に富み實に膳部の一珍たるを失はず。

此魚二月より四月の交に於て鉤に上る。湖面氷結の時は、雄阿寒山に傍ひ、氷穴を穿ち、凡廿尋の綸を垂れ、椴松の皮に潛める甲蟲の仔蟲を餌として、之を釣る。

十月中旬に至れば產卵の爲め漸く河流に溯上し、十一月に至つて盛期となる。此の時肉色皮膚に染出し、外見美麗となるも、肉味は蓋し奉期の者に比し難し。其形狀習性を察するに、湖中に閉鎖せられたる、ベニマス、に非ざるなき。乎唯產卵期に至り雄魚の鼻端、甚しく彎曲せざるは、千島に於て實見せる、ベニマスと異なるのみ。雌魚にありては、左右卵巢の發育不同なる一點、特に注意を惹く。卽ち左卵巢は右よりも必らず大にして、卵粒も亦從て多きこと下の如し。

魚の重量	卵巢の重量		卵粒	
	右	左	右	左
一一六匁	八・八匁	一一・三匁	四七九	五六一

一〇七	八・九	一一・二	四一七	五一三	
一一八	九・五	一二・二	四五七	五七七	
一〇九	七・八	一〇・四	三七五	五二〇	
？	七・八	九・〇	四〇八	四五八	
？	七・三	九・三	三五三	四二九	

移殖の目的。一水面に新種の魚を移殖するに當り、其目的とする處。蓋し左の三要點を含む。

一、新種魚の增殖を計ること其主なり。

二、回歸性を確んとすること其二なり。

三、稚魚放出の數に對する回歸數の割合を知らんとする其三なり。

鮭鱒孵化事業の成功は、其魚の回歸性と其放出數に對する回歸數の割合如何に基かざるを得ざるものにして、苟も疑を此點に挿むときは、以て斯業の大成を期すべからず。方今、鮭鱒魚、年を逐ふて減耗し、人工孵化事業の必要を促すこと愈急なる場合に於て、此要點の明かならんを欲するも、未だ適切の實例に乏しきを遺憾とすること久し。幸に本事業の如きは、此點に少からざる光明を與えたるものと云うべし。

二、阿寒湖

明治二十六年八月、編者自から阿寒湖に就き、採卵の適處運搬の難易を調査す。當時の日記より抄錄すること左の如し。

明治二十六年八月三日午前七時半、釧路出發、食糧を包み天幕を攜らし、鳥取村を經て釣別に致り、蝦夷の家に一泊す。四日蝦夷の嚮導に依り阿寒湖の南岸ヌヲロに達す、此處溫泉あり數條の流をなす。入浴に適せり。春秋二期、釧路、北見の蝦夷等集まり來りて、或は釣し、或は木皮を晒して衣服の經緯を製す。五日舟を仆ひ、湖に浮ばんとす。偶々風浪あり果さず、六日に及ぶ。七日早朝ヌヲロを發し湖汀を一周し、かばちゑっぽの泝上する河流を探究す。卽ち下の如し。

ヌヲロ

溫泉水質惡し。

ポンヲサルンペ

河幅四尺許、水量多し。其源は近く、雌阿寒山の麓に發す。水溫、湖水六十八度（華氏）のとき、五十五度を示せり。

水質淸澄、かばちゑっぽ多く泝上す。

ヲンネヲサルンペ

水質泥濁、ウグイのみ栖息す。

ヲタウンペ
水質同上、河幅六七尺、雌阿寒と、フプシヌプリの間より來る。

キナチヤウシナイ
河幅三尺許、極めて緩流なり。かばちゑっぽ、少しく泝上す。

カパチエツポナイ
河幅同上、水濕他に比し最も低し、泝上の魚は、其名の如し。

ヲンネシリコマベツ
ポンシリコマベツ
河幅四、五尺、かばちっゑぽの泝上多し。ポンシリコマベツは十勝國足寄へ越ゆる者、此河に沿ふて行く。

ヲタウンナイ
ヌヲロの正北に當りかばちゑっぽ、少しく泝る。

ポンチウルイ
ヲンネチウルイ
共に北見の界より來る。ポンヲサルンペより少しく大なり。かばちゑっぽ泝上す。

ケネタンペ
かばちゑっぽ、少しく泝上す。

イペシベツ
湖中の東北隅に存る最大の河なり。幅十五尺余、源を一小湖に發するも中途に於て涸渇すること八丁余、湖にあめます、うぐい多し。本流には、かばちゑっぽ、盛に泝上産卵す。
イペシベツより湖口迄は、雄阿寒山の麓にして、ざん岩壁立奇石磊々流水なし。唯見る岩角出入して小湾をなす處多きを、其イペシベツに隣れるを、セセクモイと稱す水底に湧泉あり。冬期氷結させるは、一に此處あるのみ。イトウ魚好んで此湾に遊泳すと云う。次は、オコテンタサリウシ と稱し深さ十八尋、次は カパツテウシモイ と云ふ深さ二十四尋あり。春期かばちゑっぽを釣する處とす。湖口とぬをろの間に ポツケと稱する處あり。山腹數畝の地、泥土沸騰し水涯に

凄じき熱湯を出す。華氏二百八度を示せり。

概云するに、阿寒湖は周回七里、其廣、二里、其袤一里半にして、四ヶの島嶼湖中に散點し、眺望絶佳なり。然れども其水質に至りては、極めて清澄なる能はず。湖汀に繁茂するもの、ガマ、よし等多し。

右調査を遂げ採卵並に運搬の便否を考へ、同年十月再び輕便なる孵化器を携へ行き、ポンヲオルンペに於て、卵子一万八千粒を採收し、發眼時期を俟ち、十一月下旬、千歳孵化場に致したり。

卵子は一万を分て、膽振國洞爺湖に放養の目的を以て、紋鰹郡壯瞥孵化場に與へ、殘余の八千を千歳孵化場に於て孵化し、池中養育の狀況を窺ひ居りしに、其發育の狀大に移殖するに足るべき見込ありしを以て、二十七年支笏湖に移殖することに決し同所の孵化場撰定に着手せり。

三、支笏湖

支笏湖は千歳川の源にして、同郡烏柵舞村の山中に在り湖の大き、東西二里半、南北三里、周圍十里余にして、面積九百町歩を包圍す。湖畔に屹立する山峰は、モラップ、フプシヌプリ、タルマイ、エニワ、モンペツ等にして、巉岩落々湖畔跋渉すべからざる處多し。

砂明かに水清く、湖心未だ幾何の深さあるかを知らず（因に云う。ホロシレ、とエニワ山の中間に於て、漫に繩を垂下せしに、百八十尋に達せり。）湖の大さ此の如くなるも、之れに注ぐ河流に至りては、實に微々たり。卽ち湖の西南偶にある ピプイを始とし、ネナリシトマナイ、オコタンペ等にして、他に涓々たる細流ありと雖ども、四季流水あるに非ず。唯、モンペツ山より來る一川にして、シリセツナイ と稱するは、終歳涸渇せず。湖口の北數町の處に於て峻谷を出でて湖水に合す。卽ち撰んで以て孵化場となせし處、此なり。湖水の魚類は、あめます、及び、かじか、の二種あるのみ。

四、移殖の實行

孵化場已に落成し、諸般の準備亦整頓せるを以て、慈移殖を實行し、三年間に湖水に放出せる尾數、左表の如し。

年次	阿寒支笏發生數	記事
二十七年	三〇六〇〇〇	十二月二十九日着 同十九日より翌年三月下旬に渡り發生す。
二十八年	一五〇〇〇〇	シリコマベツにて採卵
二十九年	二九七四	

二十八年	八〇〇〇	一七二〇〇	一〇三七	十二月十一日着翌一月より三月に渡り發生イペシペツにて採卵。
二十九年	四〇〇〇〇	三六四〇〇	三八五二	十二月十四日着以上同じ。

かばちあっぽの外、鮭鱒を放出すること、左の如し。

年次	魚種	受付數	孵出數
二十七	鮭	二〇〇〇〇〇	一九七二一八
二十八	鮭	二一〇〇〇〇	一九三四二一
	鱒	一二七三〇五	一〇六八〇八
二十九	鮭	二一一八〇〇	一五〇〇〇〇
三十	鮭	三五〇〇〇	？

稚魚湖水に出ずるや、前住の魚族、好餌を得たるを喜び、孵化場の前面に來集し、屢釣に上る。其口必ず四、五の稚魚を呑噛せざるなし。終に吾人をして、果して移殖の實を擧げ得るや否やを疑はしむるに至れり。

五、結果

稚魚の呑噛に逢へること前記の如くなるも、事業終に空しからずして、其結果を見るに至れり。先づ最初に釣者の注意を惹きしは、鱒魚にして、二十九年六月孵化場の北數町、ポロシレトに於て釣得せしもの、ます寫生第三圖の如し。（編者註寫眞は畧す）蓋し孵出してより僅かに半歳なり。八月、ヒブイ川に於て捕へしもの一尺二寸にして側面の斑點消滅し、鱗色形狀鹹水に於て得たるものと異らずとの報を得たり。鮭は湖中に止まるよりも、川を下りて海に出でんとするもの多きが如し。其時期は、夏期にして、年齢は、十七、八ケ月ならん乎。鮭魚の消息に就き、始めて聞き得たるは、二十九年五月にして、湖口に異樣なる魚群を認めたりとの報を始とし、三十年六月、ポロソウの下に於て、クシバシテと稱する蝦夷本川に曾て見ざる魚二十余尾を捕獲し、尚七、八月に於て、アノカヨ、なるもの四十余尾を捕獲せるを聞けり。湖水に於ては、かばちあっぽの差網に罹りたるもの數尾あり。その成長左の如し。

雌體長	九寸二分	體量	五十六匁
同 同	九寸三分	同	五十六匁
雄 同	一尺五分	同	五十九匁

尚ほ探知する處に據れば、ルトクルなるもの二十九年より、ぶいらに於て簗を用ゐて數多の鮭魚を捕へ居りしも、秘して人に語らざりしと云う。

かばちあっぽに付ては、三十年十月に、孵化場の前面に於て、一群の魚其數、數千、瀧喇水面に躍るものあり。然れども、舟の近くあれば其影を望んで遠く遁

附篇

るを以て、其何物たるを辨せざりしも、種々苦心の末、同月二十三日に至り、始めて一尾を釣得し之を檢するに、其形狀鱗色、正に、かばちゑっぽなり。一往一來し、シリセッナイの沿岸に優遊して、十一月の下旬に至り遽かに養魚池より落下する流水に泝上せんとするもの多々なるを見たり。然れども當年は、捕獲採卵の準備なかりしを以て、湖畔に天然產卵をなさしめたり。蓋し、シリセッナイの川峻谷を奔りて、魚の泝上を許されゝばなり。

當年、かばちゑっぽ徊遊の狀況を視察し得たるを以て、三十一年には、湖上池水の注ぐ處に築堤し、岩石を除き產床を作り、魚の輻湊を催し、且つ傭舟の繫泊に便にす。又夏秋の交魚の居所を探究せしめしに、八月には、エニワの岬より、タコタンベの沖に於て、數十間の列をなして水面に出沒するを認めたり。而して、シリセッナイには九月中旬に徊游し來り、水を拔て跳上すること頻々、頗る奇觀を呈せり。十月中旬に至れば、魚體紅褐色となりて水を彩り、岩上に在りて遠く魚群の往來望むを得べし。觀者皆云ふ、三万の數を下らざるべしと。捕魚は建網を用ゐ、十月十七日より三十日に渉り雌雄合計一千七百五十余尾、內八百七十尾より、三十九万六千の卵粒を受胎し得たり。

三十二年七月中、魚群の往來を認めしは、エニワ岬に於てせること、シリセッナイに回歸せしは、九月中旬なりしこと凡て前年と異なるなし。但風波頻りに至りて、捕獲に便ならず。漸やく八百三十尾余と卵子八万五百粒とを得たるのみ。

概言するにかばちゑっぽは孵化後三年にして生殖するを得るものにして、其目的を達するには、湖中適當の河流あるも、一の泝上するものなくして、反て泝上し得ざる、シリセッナイの水に集るは明かに、其回歸性の強きを示すものにして、其群數三万を下らずとするときは、廿八年放出數十万余尾に對し三割の生存たり。蓋し親魚は產卵を了れば、其多數は斃死するもの、如くなるを以て、二十七年に放出したるもの之れに加はり居たりとは言ひ難し。鮭は湖中に止まざるもの、如く、鱒に付ては、未だ產卵の爲に回歸せるものに逢はざるは、些か遺憾とする所なれども、已に、かばちゑっぽに付て上記の成績を見る。以て孵化事業の効力如何を推測するに足らん乎。

一、鮭鱒の種川及び漁業

本道河川の海に朝するものにして鮭鱒の泝上に適するもの、其數百六十八條、十一湖、其流域の稍大なるも絶て、泝上せざるもの僅に卅七條、本道鮭鱒漁利の豐富なる所以のもの蓋し偶然に非ざるなり。左に河川名を列記して、以て種川の分布を明にして、併せて等級を分ち泝上の厚薄を示す。

國名	一等	二等	三等	四等
渡島	上磯郡茂邊地川 同　郡知内川 松前郡及部川 檜山郡天野川 同　郡厚澤部川	上磯郡有川 同　郡木古内川 檜山郡石崎川	龜田郡落部川 同　郡鳥崎川 同　郡尾白内川 同　郡折戸川 同　郡戸井川 同　郡汐泊川 同　郡松倉川 同　郡龜田川 上磯郡木古内川 松前郡福島川 同　郡茂草川 同　郡大かもち川 爾志郡突府川 同　郡相沼内川 同　郡見市川 島牧郡千走川
後志	瀬棚郡利別川	古平郡古平川		

石狩	石狩郡石狩川	壽都郡朱太川 磯谷郡尻別川 岩内郡堀株川 余市郡余市川	濱益郡濱益川	同　郡泊川
天塩	天塩郡天塩川			石狩郡小樽内川 厚田郡濃晝川
北見	紋別郡湧別川 常呂郡常呂川 網走郡網走川 同　郡網走湖 斜里郡斜里川	枝幸郡ぽろぺつ川 紋別郡ぽろない川 同　郡をむい川 同　郡渚滑川 同　郡をうこつぺ川 同　郡常呂郡さろま湖 常呂郡さろまぺつ川 網走郡うらしぺつ川 網走郡斜里郡濤沸湖 斜里郡やむぺつ川	宗谷郡さろぺつ川 枝幸郡としらんぺつ川 同　郡とふしゆぺつ川 斜里郡うなぺつ川	枝幸郡枝幸川 同　郡をつひぺつ川 紋別郡をといねつぷ川 同　郡藻興部川 同　郡元紋別川 同　郡ほろ—川 網走郡まるまん川 斜里郡うなべつ川 同　郡をんねべつ川 同　郡るさ川
根室	目梨郡らうし川	目梨郡るさ川	目梨郡しやしるい川	目梨郡もいれうし川

膽振

有珠郡をさるべつ川

日高

靜內郡染退川

十勝

十勝郡十勝川
同　郡大津川

釧路

釧路郡釧路川

同　郡くんねべつ川
同　郡ちうるい川
標津郡いちやに川
同　郡標津川
野付郡根室郡西別川
根室郡風蓮湖
同　郡風蓮川
同　郡べとつか川

白糠郡をんべつ川

同　郡るくしゆべつ川
同郡もとさきべもい川
同　郡さきべもい川
野付郡とほろ川

當緣郡べるぶねい川

同　郡ちよらい川
同　郡うゑんべつ川
同　郡こたのか川
野付郡しゆむべつ川
同　郡床丹川

浦河郡幌別川
同　郡元浦川
三石郡三石川
新冠郡新冠川

樣似郡ゑさまんべつ川
三石郡鳧舞川
新冠郡沙流郡厚別川
沙流郡沙流川

厚岸郡別寒邊牛川
白糠郡庶路川
同　郡白糠川
同　郡尺別川
十勝郡直別川
當緣郡廣尾郡紋別川
廣尾郡豐居川

同郡しゆむからこたん川
同郡ほんしゆむかゑこたん川
同　郡無異川
野付郡茶志骨川
同　郡とひか川

湧洲郡錦多峰川

湧拂郡鵡川

幌泉郡猿留川
幌泉郡樣似郡にかんべつ川
樣似郡幌滿川
靜內郡穩別川
沙流郡門別川
幌別郡登別川

山越郡遊樂部川
國後郡けらむい川
同　郡にきしよろ川
同　郡にきしよろ川
同　郡晉根別川
同　郡東沸湖
同　郡東沸川
擇捉郡内保湖
同　郡内保川
同　郡うるもぺつ湖
同　郡うるもぺつ川
紗那郡らうし湖
同　郡らうし川
同　郡留別川
同　郡としもい川

白老郡白老川
同　郡敷生川
山越郡長万部川
國後郡泊川
同　郡をんねと—沼
同　郡をんねと—川
同　郡るるい川
同　郡のつか川
同　郡ちくに川
擇捉郡ぺろんぺつ川
振別郡老門川
同　郡をんねぺつ
沙那郡有萌川
藥取郡乙今牛川
同　郡まくよまい川
同　郡もよろ川
同　郡さるや川

同　郡厚眞川
同　郡苫小牧川
白老郡社台川
山越郡紋別川
同　郡國縫川
國後郡をんねちふんぺつ川
同郡ぽんちふんぺつ川
同　郡ふるかまつぷ川

勇拂郡いとい川
同　郡覺生川
同　郡樽前川
白老郡あよろ川
幌別郡幌別川
勇拂郡白老郡別々川
山越郡野田追川

同　郡紗那川	同　郡としるり川
同　郡別棧川	
藥取郡とーろ湖	
同　郡とーろ川	
同　郡藥取川	

以上河川の一等二等三等は保護川として、廳令の規定する所あり。四等川は、鮭魚の泝上に適するも、目下特に種川として保護する價値を失ひたるものなり。

次に、鮭鱒の漁業に就き其發達の況を調査するに、鮭の產額に付ては、寛政年間に左の記事あり。算法違へりと雖も錄して以て、參考に資す。

松前夷地鮭出高大概積り（寛政十年日記蝦夷道知邊）

西　地

一万二千石目	いしかり
六千石目	るゝもつぺ ましけ
千石目	てしを こたんべつ
千石目	そうや
千五百石目	はまゝしけ あつた
千石目	よいち
千六百石目	いはない すつゝ
三百石目	せたない
七百石目	あつさぶ上の國

合二万五千石目

東　地

五百石目	くなしり
三千石目	きいたつふ
五百石目	くすり とかち
二千石目	しこつ
五百石目	ゆふゝつ
三百石目	しらをい
三百石目	しら
三百石目	ほろべつ

二百石目　しりうち

東西合三万六千三百石目、但一石に付鮭五千本積り、此鮭百八十一萬五千本。

外

拔荷鮭七十二萬六千本、但一石に付鮭二十本積り。

二口〆鮭二百五十四万千本

自明治六年至同三十一年　鮭産額表

年次	渡島	後志	石狩	天塩	北見	根室	釧路	十勝	日高	膽振	千島	合計	六年に對する比例
六年	一八三〇	一九四九一	三七八八	五二九四	二二四三三	一一七三	—	八三三	五〇一六	二三四一	五一九八七	一〇〇	
七年	一四〇五	二一五四	三七九九	三五三五	一四八一四	七七四	一八八	二五九七	六〇五三	一四九八	二六八九九	五二	
八年	二七〇九	一八〇九九	三八六三	三六三〇	一一八一六	六三三	—	二五九七	四五九九	二六二一	五〇五六七	九七	
九年	二六四三	一八六二三	四四四九九	四〇二九	一〇八〇五	五二三	一四二一〇	四一六六	五九一〇	五八五八六	五八五六九	一一三	
十年	三一四一	一五八九六	五六四九六	二二八九	一〇六五六	六九三	一四三五	六〇七三	三八九六	六一五二八	六一五六一	一一八	
十一年	一九四七	一七四八六	三七六七	五四八三	一八八一八	三一八四	一五八〇	八六一九	五〇八五	七三九六一	七三九六一	一四二	
十二年	四五五六	二四九七〇	五九五〇	七〇三九	一四八六六	三一七八	九一五一	一四二六	五三二一	一〇七八九	一〇七八九	一九四	
十三年	一六三八	二三八五五	三六六六九	九六〇一	一四八六六	三一三七	一七六〇	一二五六五	一四五五	一三三五〇	一〇三六七	一九九	
十四年	一三八五	一六二九一	三六六六六	七三〇七	一九六三五	三一三六	四九三五	一三五三五	一五六六三	一三六〇	八六六五一	一六七	
十五年	一五三三	二六七三六	四一二二	三四九三	二三六〇一	五二三	五四三五	九九八八	九三七五	一三八〇	七〇五三	一九四	
十六年	一八九九	二〇〇五八	八七一八	一二五一三	二八四四二	五三三七	一四二六	九一五一	五三一六	一四九八	一〇〇八〇	一九九	
十七年	三八五七	五四四八	四六二九	一一〇一五	二四四七〇	一九六六	二八七五	六〇一〇	九三二七	一三四二	八六六五一	一九七	
十八年	二九五九	五七七一	四〇四〇八	九〇一三	三四九六七	二一三一	二九〇〇	九三二七	一三八五一	一四九九	一〇〇八〇	一九四	
十九年	二二六二	四二七〇	六九四三一	一一三九五二	三六二〇七	四四三〇	一一八〇九	一三八〇	二二〇八	一三四九	一一七〇五	二二七	
二十年	四八五二	五五七六	三五四九	一一四〇四	二七二四九	二八八五	一〇一三	八六七六	三四九三	一一〇六	一三九九四	二三七	

此代永六万三千五百二十五〆文、但兩に四十本換へ統計の徴すべきものは、開拓使以後に至りて、始めて是あるを以て、此間の狀況を知るに由なし。然れども、前記產額と開拓使當初に於けるものとを比較するに、著しき漁業の發達なきものゝ如し。爾來斯業の盛衰は左表に依て知るべし。

自明治三年至同三十一年 鰊産額表

年次	渡島	後志	石狩	天塩	北見	根室	釧路	十勝	日高	膽振	千島	合計	三年に對する百分比例
三年						九二四					三八三	一、二八七	一〇〇
四年						七八四					一	七八五	六〇
五年				九二	七八	一、〇五一	一五		五九		二六	一〇、一三八	八〇
六年				三〇四	五二五	三一一	二五		五七		二五	一二、〇九五	九三〇
七年				二九五	五八六	五二六	一七		二七		四七	一一、三四〇	八六五
八年			四〇九	四七三	七九四	三四九	二七		二七		七九	一二、八七八	九九一
九年		二八	六五三	一四二	三一	二七七	二七	九一	三一		三三	一一、〇九四	八四九
十年		三	七七四	一、四〇四	一、〇三五	一、〇三五	二〇		一四二		一四二	一五、〇三五	一一五八
十一年		二四	三一九	六九二	一四三	五、二二五	二〇	二三三	二七〇		二八	一八、六三二	一四三三

年次	渡島	後志	石狩	天塩	北見	根室	釧路	十勝	日高	膽振	千島	合計	三年に對する百分比例
二十一年	四二一〇	八〇三三	一六二七二	五八六一	一六〇七六	三五九八七	二四九八	三五一六	七八五〇	二六四八	一九三一六八四	二二五	
二十二年	六一四九	三九七六	一三一七四	三四四六	一六〇六〇	三六四五	二四九八	三五一六	七八五〇	二六四八	一九三一六八四	二二五	
二十三年	一八二四	二五四八	一〇一八六	三三七五	一九〇七九	一五五四七	一五〇七九	一四一五三	八四四四	四九三三	一七三一六四	一八二	
二十四年	三三九	四一八一	一〇二九四	四〇三三	一四〇〇五	一五五四七	六二五三	五八五一	五三五一二	五〇八九	九二四六	一六一	
二十五年	三三五〇	五〇四四	一一八八八	四〇七四	一九六五六	一五五四七	六二五三	五八五一	五三五一二	五〇八九	九二四六	一六一	
二十六年	一八九四	二三五三	二七五八	三八九	一九七五	三五九八七	二四九八	三五一六	七八五〇	二六四八	一九三一六八四	二二五	
二十七年	八九八	八八六	三四二	三四〇	一四一六	二六八五六	一一三〇	二三二八	七八五〇	二六四八	一九三一六八四	二二五	
二十八年	八三八	一一三八	四三三〇	四九五九	一四一三	一五七八三	一六二四	三六四五	一〇八七六	四九七四	一六七四五	一〇一	
二十九年	七六四	五六七	四九五九	八三五	一四一三	一五七八三	一六二四	三六四五	一〇八七六	四九七四	一六七四五	一〇一	
三十年	一五二〇	一〇一七	六二五六	八三五	一四一三	一五七八三	一六二四	三六四五	一〇八七六	四九七四	一六七四五	一〇一	
三十一年	九二五	一〇四五	一二六二	一二八	一四一三	一五七八三	一六二四	三六四五	一〇八七六	四九七四	一六七四五	一〇一	

十二年	九八	｜	一八〇	三一七	一、〇一五	五八四	八七	七六	五八	｜	一五、八〇〇	一八、二三五	一、四〇三
十三年	四六	二	二一九	三三九	一九七	三四八	三三	｜	一四四	四三	一六、一九〇	一七、五六〇	一、三五一
十四年	一〇三	｜	二八一	三八七	六〇九	八六八	七六	七三	六五	一一三	七、四九四	九、九六八	七六七
十五年	四六	｜	二一〇	二四九	一、九六五	一六四	二	二三三	八	二九	一六、二〇二	一九、一〇八	一、四七〇
十六年	一九六	一	四三三	五七四	六三七	九六七	五六	一七〇	｜	一三三	一〇、七一二	一三、八五八	一、〇六六
十七年	二五一	｜	一一一	三一五	四三三	三七七	｜	一九〇	三六	七九	一四、九二三	一六、七〇四	一、二八五
十八年	八三三	二	一四五	三三〇	二〇八	四九一	｜	一五九	｜	一九八	七、〇三一	九、二八七	七一四
十九年	五七七	一八	二五六	四二九	一、〇八一	一、〇三三	三	一六三	一	二七七	一、九九六	五、八四三	四五〇
二十年	三四一	一四	五三三	三六九	六九五	六九一	｜	一九一	四四	一八五	二八、五二八	三一、八六一	二、四五一
二十一年	三一二	三四	三五六	二六〇	四九八	九八〇	一七	七八	三八	二〇八	四五、三五七	四八、一三八	三、七〇三
二十二年	五五三	二九	二八一	五六五	一、〇五三	一、一九七	八	四六六	一五	三一七	一一、一三四	一五、六一八	一、二〇一
二十三年	一三九	三一	三八七	三八三	四一七	六一六	｜	四二四	五	一三一	五八、七〇七	六一、二〇〇	四、七一一
二十四年	二九七	三三	五七一	二三六	九一九	九一五	四〇	三三三	五	一八三	八、七八九	一二、三一〇	九四七
二十五年	四〇八	一七	四五九	三八八	一、二二六	二、四二四	四三	四〇〇	一	一四三	五二、二三六	五七、七二四	三、九二九
二十六年	一四一	四四	三一三	二四三	八三五	三、二三五	一九	一〇八	一三四	二九八	九、九六九	一五、三三八	一、一八〇
二十七年	二九九	八五	六三六	二五三	五一五	一、七一三	八	二五七	二八四	五九二	五五、七五四	六〇、三九六	四、六四六
二十八年	二、〇八〇	一一八	四一三	一三八	一、〇八七	三、六七二	一三九	六八	二八八	八八七	一八、一一一	二七、〇〇一	二、〇七七
二十九年	七五三	五四	三三六	二三三	四、五一九	三、七四六	三五	一八	三三七	七二三	五四、九六三	六五、七二一	五、〇〇六
三十年	一、〇八六	八一	三九四	二三三	二、一二三	八、二四八	一七五	一七四	六〇四	一、〇二五	一五、六八八	二九、八三〇	二、二九五
三十一年	六五七	二八	八一〇	一六〇	二、一一一	三、一五八	六九八	一〇四	二一九	三七〇	一五、四〇九	二三、七二四	一、八二五

即ち鮭漁業は明治六年に比するに、明治十九年に至り、二倍の發達をなし、二十三年に至り三倍となる。之れを極點とす。爾來衰退の兆現はれ、二十七年に至り、著しき減額を來し、尚逐年下向を示す。鱒漁業は其收獲高を比較するに、豊凶年を隔つるもの丶如く去來の數亦著しき差あり。然れども、其ヤマベと稱する時代に於て、釣客の濫獲する狀態より推すときは、斯業の持續せらる丶は頗る奇異の現像なりと言ふ外なきなり。